
哀変わらず、哀らしく

mine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀変わらず、哀らしく

【コード】

N1083Z

【作者名】

mine

【あらすじ】

罪は確かに深い。けれど

「なんで……なんで。どうしてあんな物…作っただんですか!?!いいえ、作れるんですか!?!」

「帝丹小学校1年生 灰原哀を指名手配する。重要参考人として江戸川コナンも聴取を行う。」

二人を引き裂く、分かったた筈の真実。

「…私は…逃げた、だけ…」

「違う！灰原…お前が背負う必要なんか…」

「あなたは犯した罪から逃げ出してのうのと彼と幸せに暮らしている…私は散々大切な人に迷惑をかけて、結局消してしまった…

…私が一体何を間違えたって言うんですか!？」

支えようとしながらも、苦痛を感じる仲間の声。

「何でそこに拘るんですか!？宮野さんは何も悪くない!」

「どうして…どうして…死んじゃったのっ…?」

「『探偵が犯罪者を許してどうする』……か。きつい事言っなあ

…ホンマ。」

「もし、あたしがあの子やったら…泣いて喚いて同じ事言っ…んやろな。」

真相を追い掛ける二人。

「哀ちゃん…あの子は一体何を見ているのかしら？小学生に見えな
いってだけで済まされる問題じゃない……………あの子、何か抱えてる。」

「…たとえどんな道を歩んでも、最後まで着いていきますよ。僕だ
つて、警察官……………いえ、美和子さんを愛する 人間ですから。」

それでもまだ、私は彼を愛してる……………？

「相変わらず……………愛らしいよ…お前の、その……………」
「っ……………バカっ……………っ、っ……………あっ……………」

「っ……っ」

両足が痛む。

ここまで宛も無く歩き続けるのはあれ以来…いや、あの時は行き場があったし、あの時より遙かにずっと逃げている。

『哀ちゃん！あゝそぼっ！』

『灰原さんが……凄く、優しいから……』

『ちゃんと食えよ、灰原。身体に良くねえぞ？』

笑顔が弾けてるあの子達。今はどうなのか分からない……

けれど、私は近付けた。あの子達みたいに笑えるようになった……

そう言ってたわよね？工藤君……

なのに、今は……

『哀ちゃんに……ずっと、元気で居て欲しいから。』

私と彼が、一緒に居る事を…許してくれた、人。

私は…それこそ、あなたと彼を引き離れた元凶なのに……

でも、もう彼女も彼に探させはしないでしょうね。だってこうして…私は…世間に犯罪者として知られてしまったから…

『俺も、愛してる。』

…そんな過去、要らなかった……
私には幸せなんて…得る価値すらない……いいえ、私の幸せは…ず
っと、あの監獄のような場所に居る事だったの。
もう二度と……私には幸せなんかやってこない…もう戻れないし、
もう進めない…

「光なんて…見なければ、良かった…」

0 (後書き)

次話：12/4 12時

『じゃあ私とは正反対ですね。私は妹が一人ですから……』
『私、去年からここに居るんです……少し物理に秀でてた。ただそれだけで……』

『良い……ですよ。宮野さんは。もう日本に帰れるんですから……』
『ありがとうございます。私、ここで頑張ります。宮野さん……お元気で。』

誰……？

『宮野さん……宮野さん……』

『どうして皆、は……あ、やめ、て……死にたく、ない……や、だ……』

『ま、だ私……やら、なき……あ……』

『は、い……ら……』

え……

『灰原……？』

えっ？

~~~~~

「え……」

突然掛かってきた声に反応すると、その方向には相変わらず並んでコナンが歩いていった。

(…：そうだったわね…：)

状況を理解しながらも、すぐに灰原はコナンから目を逸らした。

「哀ちゃん、はい。チケット。」

灰原の手元に、蘭は小さなチケットを差し出す。

「あ、ありがとうございます。」

「どうしたんだよ灰原。眠いなら……ってか、蘭。」

「え？」

「灰原のポーチ。お前買ったのか？」

「うん、そうだよ。だって似合うじゃん……分かんないかなあ。子供物の可愛いポーチをぶら下げている灰原の方向にコナンはちらちらと振り向いた。」

「いや、そりゃ……似合ってるけど……」

「あ、新一嫉妬してるんだ。」

「成る程ねえ……マセガキ同士、考えてるのはそついう……」

「お前ら……勝手に決着つけんな……」「そんなはずないでしょう！？」

絶妙なタイミングで重なったその台詞に、園子と蘭は大笑いする。そして向きになって否定したコナンはがっくりと肩を落とす、自分が馬鹿らしく感じられた灰原は下を俯いた。

1ヶ月前。組織は完全に壊滅した。だが、研究所は全て爆破されており、解毒剤を作る事はもう永遠に叶わない事となった。

『ごめんなさい……私のつ、せ、いでつ………』

製作者であつた彼女は泣いて、謝つた。

自分自身が戻れなかつた事は意識なんてしなかつた。

ただ、あんなに優しくしてくれた存在の姿は、もう元には戻らない。工藤新一という一人の人間を、彼女は結果的には『殺した』。

自分があんな薬品を作つたせいで

自分が両親の研究の引き継ぎなんかしてしまつたせいで

自分なんかがこの世に生を受けてしまつたせいで

『仕方、ねえ……よ……』

結局、コナンはその日それしか言えなかつた。

蘭には自分の正体は打ち明けた。

『そっか……やっぱり、そうだつたんだ………』

だが、灰原の事は「同じように幼児化させられただけ」としか言わ

なかった。

もし灰原がそんな薬を作ってた組織の元一員だと知られてしまうと、小五郎ならともかくさらに周囲に知れ渡ったら…という不安があったからだった。

『悪いけど蘭……………そうしてくれるか？』

『うん、分かった。約束する……………』

そして、蘭には園子と、蘭の両親以外には伝えない事を約束させて、FBIの情報操作で「工藤新一の死亡」は全世界中に発表された。同様にして、宮野志保も「死亡」が認められた。

『勘づいてたとはいっても、まさか本当に幼児化してるなんてね…  
…でも、本当に戻る為のデータ…手に入れられなくて…ごめんなさい。私達FBI…これが、最後に来る事よ。そう』

そしてコナンと灰原の戸籍を捏造する事で、正式に「江戸川コナン」と「灰原哀」は誕生したのであった。

だが、受け入れたコナンと対照的にそれから灰原は何も見えてないかのような日々を過ごす。

『哀ちゃん…最近、元氣無いな…って。けど、何もしてあげられないような…そんな、感じ……ねえ、コナン君。何か…あつたの…?』  
彼女は、誰に話し掛けられても、素っ気ない言葉で返すようになってた。いや、そもそも殆ど誰も話し掛けなくなつた。

虚ろな瞳をして、何にも興味を示す事なく、何にも意味を感じる事なく、何にも行動を起こすことはなかつた。

それが、彼女の「絶望」の姿だつた。

この日、コナンと灰原、そして蘭と園子の4人はトロピカルランドに来ていた。全て蘭の提案で。

頑なに拒んでいた灰原も、蘭が優しく説得するとすぐ折れたのか、無言で頷いた。

(でも蘭、わざわざこの子まで連れて来て…どうするの?)

園子の問い掛けに、少し蘭は唸ると灰原の方向を向いて呟いた。

「新一はそんなでもなかつたけど、哀ちゃん…最近、変だし。歩美ちゃんとか、光彦君とか元太君とか…話しかけられる雰囲気ですらない、っていうか……戻れなくてショックだつたと思うんだ。何も知らないまま…あの子は、巻き込まれちゃつたんだと思う……少しでも、気を紛らわしてあげようと思つて。それで、同じように小さくなつちゃつた…コナン君と一緒にしてあげようと思つてただけど……やっぱ、可笑しいかな?」

園子は暫く絶句していた。

「…蘭。」

「え？」

そして、親友の肩を強く抱き締めた。

「うん…蘭、らしいよ！そうそう、哀ちゃんをフォローしなきゃ…」

そうこう二人が言っている内に、華やかに飾り付けられた門の前に辿り着く。

「それじゃ、入ろっか。」

「ええ、入りましょ。」

「…だな。」

「……」



コナンは、ずっと灰原の方を気にかけていた。

1 (後書き)

次回  
12/8  
0時

「次、何処に行こっか？」

「別に、何処でも……」

「いいよ、哀ちゃんが決めて……少し休む？」

「え、ええ……そう、ですな……」

少しだけ元気を取り戻した灰原を見て、蘭は軽く息を吐き出した。

「それじゃあ、そのベンチにしようか。」

「……（コクン）」

小さく頷いた灰原と手を繋いで、二人はゆっくりと腰掛ける。

「……まったく、アンタが何とかしなさいよねえ。」

冷房が僅かに効いている店内で、ティーカップの中身を飲み干す園子。

「……うつせーな。ああいうのは蘭の得意分野だろが……」

「そういう問題じゃないでしょ！？新一君！」

コナンは溜息をつくとき、時計に目を見やった。

(3時…か。)  
「園子、お前…」  
「え？」

蘭と灰原の方に目を向けていた園子は驚いた声をあげて反応する。

「…聞いたんだろ？灰原の事も…」

「一応…あの子も、同じなんでしょ？」

「…まあ、な。」

「…ただ…だから、あんたが何とかしなきゃいけないのよ。」

分かってないのか、と言いたそうに園子はコナンを真剣な目つきで見ると、

「普通小さくなったら誰だって悲しむでしょ？アンタが可笑しいのよ。」

「何がだよ。」

「だって何も辛そうじゃないじゃない…：…やっぱ、新一君どっか可笑しいと思うけど。あの子がどれだけ辛いか分からないの？もう戻れないのよ？両親だって、友達だって…何処に居るかは知らないけど。あなただって…」

「悔しいぞ。」

冷たい一言が、コナンの口から零れた。

「…もう戻れねえだろ。だから、もう…サッカー部の奴らだって、クラスのお仲間だって、誰とも工藤新一は顔を合わせられねえんだ。そうだろ？それに…」

「……………」

「それに…俺は、結局 蘭を…」  
「裏切ってなんか無い！」

園子が強くテーブルを叩いたので、周りの客衆は驚いたが、構わず園子は続ける。

「蘭の元に戻ってきたじゃない！たとえ江戸川コナンでも！」

「…けどっ！けど………」

ぎゅっと唇を噛み締め、顔を覆い尽くすコナンを見て、園子はふと思っただ。

全く弱みを見せない、工藤新一の……僅かな弱さだと。

「…ごめん。でも、だったら…分かるでしょ？」

「………」

園子は話題を元に戻して、コナンに聞いた。

「哀ちゃんの気持ちも……辛いんだよ。哀ちゃんも……」

突然、その時空気が変わった。園子も、それは感じ取れた。

「………黙れ。」

「え」

さっき一瞬弱さを見せた彼とは思えない、鋭く更に冷たい声だった。

「……………くそっ。」

「ちょ ちよっと!」

足元に置いた自分のバックを蹴飛ばして、コナンは店を出た。

~~~~~

苦っ。

どうして？

こんなに優しくしてもらって、大切にしてもらって。やっぱり蘭さんの隣に居る事が…お姉ちゃんの隣に居るみたいで、凄く落ち着くのよ。

…私は、彼女の傍には居られない。心が苦痛と幸せで満たされていくから。

彼女だって、彼が戻れないと知って辛かった筈なのに。そんな物奥底に仕舞いこんで、私を少しでも元気付けようと振舞ってる。

『それ』は私のせいなのに。

彼が戻ってこないのは、私がそんな薬を作り、そんな薬の解毒剤が作れなかったから。そうよ、全て私のせいじゃない。

なのに…

「そつだ、哀ちゃん。観覧車乗らない？」
「え……」

彼女は、どうしてこんなに優しく出来るの
本当の事を聞いてないからって……なんで、こんなに……？

「夕焼けが綺麗に見えると思つんだ……どうかな？」
「そつ、です……ね。」
「怖い。苦しい。辛い。」

私は……
「……ねえ、哀ちゃん？」
「はい……？」
「……コナン君、から聞いたよ。哀ちゃん……本当は、哀ちゃん
じゃ……無いんだよね？」
「……ええ。」
「……そつか。」

…？

「哀ちゃんは、自分を大切にしたいな。」

「え…」

「…今は、新一の事は、心配しないで。」

「……………」

「新一は大丈夫…そう、言ってたから。」

「そう…ですか。」

「…我慢してるの、バレバレなんだけどね。でも、新一は大丈夫。だって」

「……………なんで？」

気付いたら、私は彼女を突き飛ばしていた。

「何も…知らないくせに。」

「え……………」

「…あなたは何も知らないじゃない。私の事…工藤君の事……………いいえ、江戸川君の事!!」

「あ、哀ちゃ……………」

「…彼はあなたの元に戻りたいって……………」

自分で言ってる事で、自分の首を絞めている。

分かってても、自然と言葉は続いていった。

「工藤、君は…あなたの事、何度もっ……………呟いて、た。戻りたい、って……………なのにつ、戻れ……………無かった……………」

私のせいで。

「あなたは、何もっ…知らなっ、い、じゃない。」
私のせいで。

「彼が感じてた辛いつ、思いもっ……………」
私のせいで。

「彼は、っ、戻りたかったのっ…………けっ、ど…………戻れっ、なっ…………」
私のせいで。

「彼、はっ…………あなたがっ…大好…っ……………」

私の…

「あああっ!」

『ダッ』

「あっ 哀ちゃん!」

全てぶち壊したのは自分なのに。

宮野志保という人間さえ現れなければ、世界の運命はもっと上手く
いった。

そう、私さえいなければ彼らは幸せになれたのだ。お互いに愛し
合う二人、幸せな道を歩めた筈だったのだ。

私が壊した。全てを。

全く関係ない私が…

「灰原……？」

気付いたら、閉まりかけの扉を開いて私は中に飛び込んでいた。
小さな揺り籠に揺られて、私と目の前の彼はゆっくりと上昇を続けていた。

その目の前の彼を、私は気付けば力一杯抱き締めていた。

2 (後書き)

次回投稿

12/16 0時

何も無い空間。それが私達の処刑場だった。

「どうして……」

次々と、友達の悲鳴が耳に入ってくる。死を恐れない人間などいない。だから私は震えた。

「皆……！」

どうして……？
私達が何をしたの……？

「さあ、君が最後の一人だ。」

何で……なのよ……

「残念だけど、上から不要だという事で、抹消する事を言われててね……良かったじゃないか。最後に君は組織に貢献出来るのだから……」

「ふざけなっ……っ……」

「め、ん……」

「それじゃ、これを飲んで。」
「あっ……うん……」

何、これっ……
熱、……熱い……

「さてと、これで君が死んだら実験も終わりだ。ようやく僕も休める……」
「っ……あっっ、っ……!」

苦しい……き、き……

ごめん、有、香……

~~~~~

私 死んだのかな。  
ははっ…情けない姉よね。 散々妹に迷惑かけて…何も償えずに、  
死ぬなんて。

「ああ、早く…早くしてくれ…！」

……何、こじこじ。  
何か……見た事あるような……

「幼児化しやがった！こい プツン」おい！嘘じゃねっ……くそ  
っ！きりやがって……」

幼……え……？

う、そ……

「なっ……」  
嘘、でしょ……？

『パアン』  
「ぐあっ…くっ、このガ…『パアン』あっ…っ  
「…」

ははっ、嘘だ…嘘だよ…  
こん、なの…

私…

『うわああああああああああああっっっっ！』

~~~~~

「はっ
」

頭の中に悲鳴が鳴り響くと、ふつと灰原は我に返って、自分の置かれている状況を把握する。

小さなゴンドラの中で、上空10mを過ぎた辺り。トロピカルランドの巨大観覧車。

「大丈夫か？」

コナンが優しく声を掛けると、灰原は顔を逸らしてコナンを突き飛ばす。

「……………何を心配しているのか分からないわね。」

「え……………」

狭い空間の中で、最大限にコナンから灰原は距離を取って座り込んだ。

「……………あのなあ。」

「……………分かってるわよ。突然乗り込んだりして。申し訳ないと思ってる……………」

「……………どういふ事だよ。そもそも、お前蘭と一緒に……………それに、……………それに……………」

自分が、園子の前で思ってしまった事を思い出す。工藤新一が死んだ原因。

それが、確かに灰原にある事。それだけは覆しようがない事実だった。許すという行動に出る事が出来ない自分が、確かにここに居る。まだ直ぐに決断を下す事が出来ない自分が、確かに居る。

何も知らせてないのが原因だが、何も考えてない園子の発言に苛立ちを覚えた事と、灰原の罪という物の存在に揺らされている事が、組み合わせさつてあの場の怒りに繋がったのだ。

「……そうよね。」

自嘲するように彼女は笑った。

「私は所詮犯罪者だもの……それに貴方からすれば結局、ただ害だけを残していっただけ……あなたは思ってるんでしょ？私が居なければ良かった、って。……大丈夫よ。あなたが気にしなくたって私はいずれ姿を消すわ。」

「……」

「あなたは恨んでればいいのよ。ずっと私を……」

「……待てよ。」

重く閉じていた口を、コナンがゆっくり開く。

「……何？」

「……逃げるのかよ。」

「当然でしょ。犯罪者なんだから。逃げないで居座ってられ」

「じゃあ、なんで『さつき蘭から逃げた』？」

「……え。」

思わぬ質問に、灰原の思考回路が凍結する。

コナンはすぐに言葉を継ぎ足した。

「それって、お前の言う犯罪者だからとか……関係あんのかよ。」

『灰原哀は犯罪者である』という命題に対してコナンは答を出す事なく、誤魔化すように問い返す。

それこそ、まだ自分の揺れる心情 灰原という存在を自分が認めるかどうかに対して答を出す事が出来なかったからだった。

「…どうなんだよ。」
数秒しか経ってないのに、まるで数分以上答を待ってたかのように感じたコナンは耐えられず聞き返した。

「……何言ってるのよ。同じに決まってるじゃない。彼女に対して
も、罪の意識を感じたから。あなたという存在を…戻れなくしてし
まった事で、彼女を悲しませた事…それに罪の意識を感じたから。
他に何かあるって。」

「違うな。だったらお前は蘭に対してだけ反応してた理由が分か
らない。」

「っ……」

強く、言葉に力を込める。

「分かってんだよ。お前は俺の方向を向く事は無かった。けれど時
折…歩美ちゃん、光彦、元太…そして蘭の表情を覗き込んだ。そ
れに言葉を掛けられたって返事はしてた、そうだろ？」

「……」

「説明しろよ。どうしてお前が…その蘭の目の前から逃げ出した
のか……」

灰原は視線を外にやって小さく呟いた。

「本当……何も、分かってない……」

「…え？」

目を覆い、ぎゅっと唇を噛み締める。
言いたい事は、もう喉元まで来ていた。

『恨まれない』なんて大嘘で。自分が言いたい事は、確かに…そこにある。

3 (後書き)

次回投稿

12/17 「7」時

感想よろしくお願ひしますm
———
m

「…知ってた？」

他人事のように、ゆっくりと話し始めた。

「吉田さん、あなたの事好きなのよ？」

「…知ってっけど。」

「本当、良いわよね…素直に自分の気持ちと言える子って…」

「お前…歩美ちゃんの事馬鹿に…」

「そんなわけないでしょ。あれが正常な小学生の思考よ…そう、正常な小学生のね。」

すつきりと、彼女は話題を繋げた つもりだった。

けれど、コナンには全くその意図が理解できない。

その時、哀しい瞳から一粒だけ、足元に雫が零れる。

「私は…言えないわ。あんな事。絶対にね。」

「…お前、まさか…」

「何を言ってるの？何度だって…」

『相手はイルカ。海の人気者、暗く冷たい海の底から逃げて来た意地の悪いサメなんかじゃ…とても歯が立たないでしょうね。』

『分かってないのね…ま、分かって欲しくも無いけど。』

夕陽を眺めてるだけで、灰原の涙は止まらなくなる。

今、コナンを見たら壊れてしまうのではないかと思った。

「……全てが終わったら。」

「え？」

「一度、あなたを連れ出して、お姉ちゃんのお墓、作った場所に行こうと思うの。そこで、私は言いたかった。私は…大切な人が出来たって。」

「大切な…人…？」

止まらぬ涙を堪える必要すらもうなかった。くしゃくしゃになりかけの、哀しさしか感じない顔を灰原はコナンに向けた。

「言わなきゃ…分からない、の………？」

貴方の事が、どうしよもないくらい……好き。

頂上を回った観覧車のゴンドラは、ゆっくりと下へと降り始めた。

~~~~~

「……」

観覧車も徐々に降下していく中、沈黙が保たれていた空間をコナンは切り開いた。

そうは言ってもただ一言、言葉を放っただけだが。

「どういっ、え……」

「……本当、鈍感……いえ、もうそれは……」

表情を曇らせて、言わなければ良かったと思ひ込む灰原。

「……あなたのお陰で私は生きてこれた……好きなの。あなたの事が……私は……」

「けど、灰原……お前……」

「分かる……でしょ……？いいえ、分かって……よ……お願いっ、だからっ……」

それでも瞳を潤ませたまま、灰原はコナンに抱きついた。

「なんでっ……？分かる……分かるっ、でしょ……う……？あなたなら、人の……心を見透かすように推理する貴方だったら……これだけ材料が揃ってて、まだ分からない……そんなはず、無いわよ……ね……？」

「っ……」

「ねえ……どうして……どうして、答えない……のよっ……」

「うっせえ！！」

コナンは力強く灰原を突き飛ばす。

それが、最後の答だった。



観覧車はゆっくりと地表に辿り着き、ドアが開かれ誘導員の誘導で二人は降ろされようとした。

「そうよ…ね。結局あなたは…彼女にしかっ…彼女しかっ…愛してない…！！愛されてない！」

「は、灰原、お前っ！」

1m程の高さから飛び降りると、誘導員の静止を振り払って灰原は走り出した。

哀しさに包まれた、孤独な心を抱えたまま、行く宛も無く…

「私なんか…貴方にとってはどうだって良いんでしょっ！？」

4 (後書き)

次回投稿予定

12/19 0時

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1083z/>

---

哀変わらず、哀らしく

2011年12月17日07時47分発行